〔書　評〕

馬瀬良雄著

『上伊那の方言』

青　木　千代吉

1

本書は上伊那郡誌刊行会からの委嘱を受けられた馬瀬良雄氏によって書かれた．A５版607ページ，手に取るとずっしり重い大冊である．それは単に量的な意味で言うのではなく，本書の質の高さを象徴するものとしての重さである．

長野県の上伊那郡は，木曽山脈と赤石山脈にはさまれて，県南部に位置する．諏訪湖から南流する天竜川が作る広い縦谷（伊那谷）の上流地域にあたる地方である．

本書編述の目的は，言うまでもなく上伊那地方方言がどんな特質を持つものか，それはいかなる歴史に立ち，いかなる人間生活の事実として，いかなる文化事象としてとらえられるかを言語体系的に明らかにすることであったと思う．

さて，本書が成るための基礎調査は次の二つの分野について行われた．

1　記述的研究の分野について

調査地点――上伊那地方の，北部，東部，中部，南部から１地点ずつ選ばれた．

調査は46年７月～48年６月にわたって行われた．

2　言語地理学的研究の分野について

調査地点	243	調査項目	283
音韻に関する項目	30	アクセントに関する項目	63
語法に関する項目	46	語彙に関する項目	144

調査は48年・49年にわたって，馬瀬教授と氏の指導を受けた信州大学の学生・卒業生20名余の人たちで進められた．

以上に調査研究の計画面だけを記したが，これを見ただけでも，この調査研究がどんなに精密で意欲的なものであるかがわかる．たとえば，東西方言の対立を持つ項目について見ても，それを243地点という精しさでとらえることが目ざされているわけである．

2

本書には，まず序章的な意味で六つの話題のテキスト方言訳が掲げられている．これは，

（１）　辰野町小野方言　（２）　長谷村溝口方言

（３）　伊那市富県方言　（４）　中川村葛島方言

の４地点の方言会話が，対照できる形で掲げられているのだが，話者の総発言数63，本書

で16ページに及ぶ分量である．熟読すると，上伊那方言会話の実相が如実にうかがえてまことに楽しく興味ぶかい．(1)(2)(3)(4)の地点間の方言差に注意をひかれるが，とりわけ(1)と(4)の両地点の方言差の著しいことに驚かされるほどである．

さて本書は，記述的研究と言語地理学的研究の二つの分野において，その調査結果が論述される．本稿でも，その分節に即して要点摘記の形で紹介を進めたい．

第三節　音韻

ここでは，上伊那主要地点の詳しい調査結果から，次のことが結論されている．

「上伊那北部は東日本方言音韻の特徴が顕著で，郡南部に行くにしたがって西日本方言音韻の特徴が漸増する地帯である．」と．

次にその詳細な研究結果のごく一部を紹介しよう．たとえば，中川村片羽の音素，拍体系について，半母音音素 /j, w/ があること，子音音素に /j̃/ があること．また拍として，/'wo/, /'we/, /j̃i/, /'wjo/, /'wja/, /co, ca/ があることを，それぞれその体系の中に位置づけ，その具体音声として〔ɯwe〕上，〔jɯwen〕油煙，〔katsɯwo〕鰹ほかを挙げられた．

そして東部の長谷村非持山，木曽楢川村奈良井羽淵方言，木曽開田方言と比較して，開田型の発音は最も古くて室町時代末期の発音状態をとどめており，次いで長谷村非持山・楢川村羽淵型が古く，中川村片羽・辰野町小野・伊那市富県型がそれに続く状態であることを例証された．

なお「子音音素」「拍音素」「共通語との対応」についても，全域的な綿密な調査から詳しい論述が進められて，上伊那の音韻における特質——上伊那の人の発音について余すところなく体系的に明かにされている．

第四節　アクセント

上伊那のアクセントを，名詞・地名・疑問詞・動詞・形容詞・自立語に付属語が続く場合，についての特徴を，前記4地点で調査し，共通語や長野県諸方言との比較において，体系的・法則的に位置づけられた．まことに詳細綿密であり，整然とした論述である．

ここで扱われた上伊那アクセントの二つの事実について紹介しよう．私は北信の生まれ育ちであるためにたとえば4拍名詞の場合，次のアクセントは耳に珍しいものであった．

ドングリ（団栗　上伊那4型，長野1型）　カミナリ（雷　上伊那4型，長野0型）

ヒラガナ（平仮名　上伊那4型，長野0型）

が，上伊那においては4拍名詞のアクセントにおけるA型，B型の現われ方の傾向として「上伊那調査地4地点方言においては，老年層では圧倒的にA型（尾高型，4型）アクセントに属する語が多く，B型（中2型）に属する語は非常に少ない」という本書の結論で，なるほどと思わせられた．

次に，形容詞に付属語がつづくときのアクセントの場合，共通語ではほとんどその形容詞のアクセントの型は変わらないことが指摘されているが，「辰野町小野方言では，形容詞の型の対立を失わせる付属語はほとんど認められないのに対し，中川村片桐では少数ながらそれが認められる」ことが指摘されている．上伊那のアクセントとして人々に知られているものに　アツケレバ(暑ければ)，サムケレバ(寒ければ)，ヨケレバ(良ければ)がある．が，これは本書によれば調査4地点のアクセントは

(32) 〔書　評〕『上伊那の方言』

辰野町小野	長谷村非持山	伊那市富県	中川村片桐
アツケレバ	アツケレバ	アツケレバ	アツケレバ

のようであって，辰野町小野以外の3地点は，「暑ければ」のアクセントは「厚ければ」と同じアクセントになっている．つまりこの3地点は型の対立を失っているのである．すなわちアツケレバ（暑ければ）・サムケレバ（寒ければ）というアクセントが伊那に有るという個別的認識は，本書によって体系的な認識へと高められるわけである．

第五節　語法

この節では，1 上伊那方言語法の位置，2 用言，3 付属語，4 表現，5 語法上の東西方言対立と上伊那方言　という構成で綿密な記述が進められている．方言語法の扱いにおいて進めるべき独創的な体系的記述で，上伊那方言語法の特質を全体的に明かにされていることが見逃せない点である．

二三の具体例を挙げよう．中川村片桐では形容詞の活用に「薄カリソーダ，悪カリソーダ，無カリソーダ……」が使われている．この方言活用は，形容詞の活用形に「様態形」を立てることによってすっきりと位置づけられている．

やはり中川村片桐に「ダメナッタンダナー（だめだったんだなあ）」「フシャーセナナー（ふしあわせだなあ）」「ダレカ　キタヨーナッタガ（誰か来たようだったが）」という語が使われる．ここに現れる「ーナッタ」の「ーナッ」は，形容動詞型活用の第2連用型「フシャーセナナー」また「アリャ　ナンナ（あれは何だ）」の「ナ」は終止形として位置づけ，ーナには多少詠嘆的な気持がこめられており，断定をやわらげ，ていねいさを加えている，と述べておられる．

伊那地方の敬語表現は，こまやかな対人的配慮を持つものとして発達していると思われるが，本書はこの第5節の中に，「待遇表現」の項を立てて文末助詞の類にまでわたって詳しく扱っておられるが，ここでは省略せざるを得ないので，1枚の言語地図を掲げるにとどめるよう．

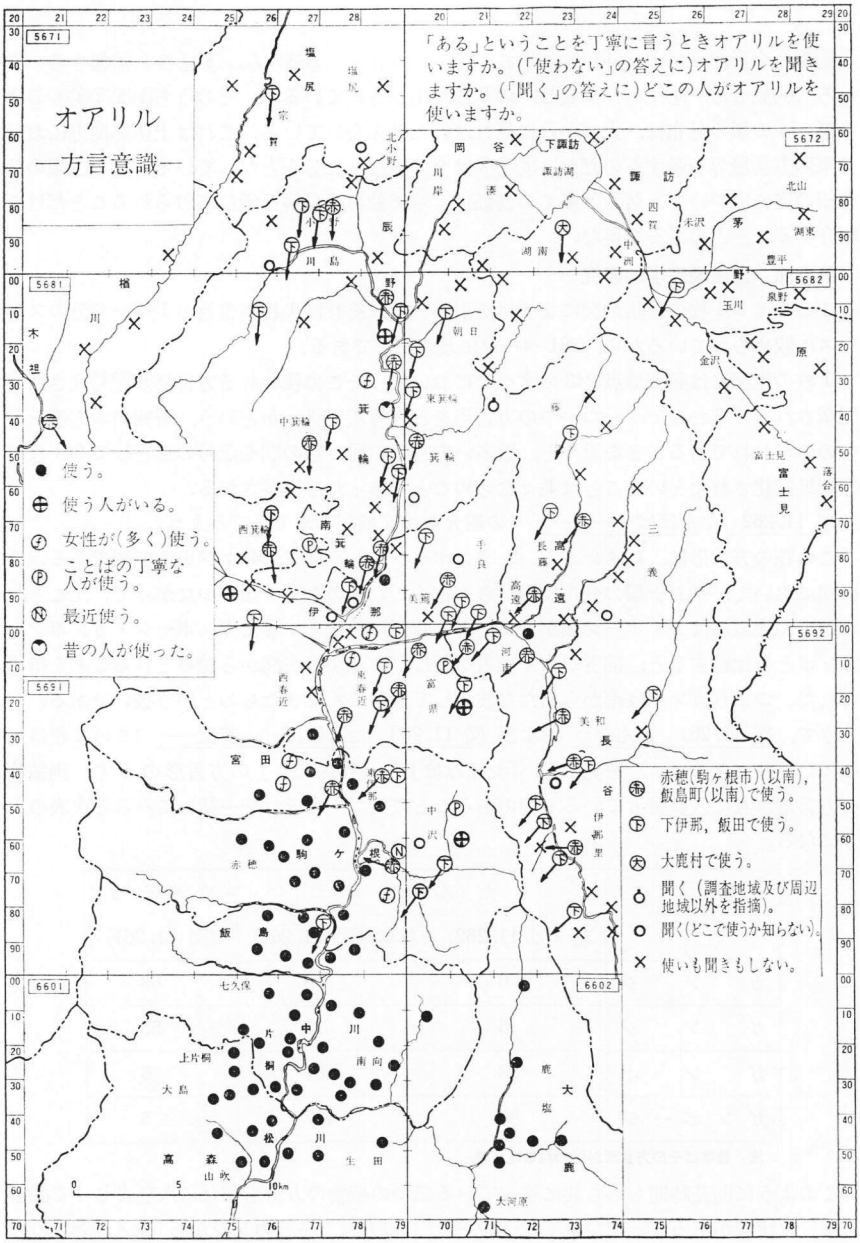
図 11.182　オアリル――方言意識――

オアリルは，アルという動詞を中核としたオ―動詞―ルという形態の敬語動詞である．この類の語としては，オカエリル（帰る）・オアガリル（上る）ほか「お……になる」という形の敬語動詞に相当するものとして，上伊那南部および下伊那の大部分の地に分布する．

この言語地図は，この語の分布がわかるほか，質問に応じる上伊那の人々の方言意識の一端がうかがえるものとして興味ぶかい．

語法上の東西方言対立と上伊那方言については，イカナイ／イカン（行カー），（傘をサシタ／サイタ（傘ヲサータ）など九つの指標を立てて，現在における使用状態を明かにされている．その1項として，サ行五段活用動詞の連用形がイ音便化するか否かについての調査においては，オス（押す），ホロボス（亡す）等2拍動詞から6拍動詞までの80語について，4地点の調査結果をもってその現れ方の差を明かにし，イ音便はすべての動詞に現われるのではないこと，その動詞語幹の最後母音の性質によって差があること，また動詞の拍数によって違うこと，なお動詞アクセントの形とも関係があることを指摘された．研

図11.182


オアリル
—方言意識—
「ある」ということを丁寧に言うときオアリルを使いますか。(「使わない」の答えに)オアリルを聞きますか。(「聞く」の答えに)どこの人がオアリルを使いますか。
● 使う。
⊕ 使う人がいる。
㊛ 女性が(多く)使う。
Ⓟ ことばの丁寧な人が使う。
Ⓝ 最近使う。
◔ 昔の人が使った。
㊦ 下伊那，飯田で使う。
㊧ 大鹿村で使う。
◔ 聞く(調査地域及び周辺地域以外を指摘)。
○ 聞く(どこで使うか知らない)。
× 使いも聞きもしない。
0 5 10km

究が詳細かつ徹底的で，たとえ一つの方言現象であってもそれを体系的事実として位置づけられていることに注目しなければならない．

動詞命令形が -ro か -jo かに関する図は，①出ろ　②逃げろ　③見ろ　④起きろ　⑤しろ　⑥見せろ　⑦くれ　⑧貸せ，の8枚が用意されているが，そのうち①②③④⑤の命令形 -jo の類の分布は，大づかみに見れば似た分布をしている．これは上伊那地方における東西方言境界を示すものだが，⑥⑦⑧は全く異なった分布となっている．この二類の分布相の違いについて，著者は多くの傍証によって独自の見解を示しておられることだけを紹介するにとどめざるを得ない．

第六節　言語地理学的研究

ここでは281枚の言語地図にまず目を引かれる．それは1枚が書籍の1ページ分のスペースに収められているから，281ページに及ぶわけである．

1枚の地図には調査地点243のすべてにおいて，そこに使われる方言形が記号化されて記載されているわけで，一つ一つの方言形をどう解釈し扱うかという，研究者の態度そのものの現われであることを思うと，数多い方言形の種，類の別を記号の形として281枚の言語地図化されたということは並々ならぬことであったと推察される．

図 11.262　たんぽぽ――花――　の紹介を論文摘記の形でしてみよう．

この花の方言形は，1 タンポポ，2 ガンボージ，3 ガンジ，4 クジナの四類である．この図において，クジナ類の分布模様から，古くこれらのクジナ類がつながっていたこと，これらの地域ではガンボージ類がクジナよりも新しいこと，またガンボージ・ガンボジとガンボとを比較すると，前者が古く後者が新しいことが分布図から読みとれることを指摘された．つまりガンボは南から新たな波として食いこんできたものという扱いである．

さて，図 11.261　かんぞう　および　図 11.263　たんぽぽ――若葉――（この2枚は本稿には掲載できないが）を見ると，「たんぽぽ」と「かんぞう」の方言形のうち，両植物の方言形が互に入れ替っているもののあることに気づく．それを一括してみると次表のようになる．

方言形	たんぽぽ		かんぞう
	花（図 11.262）	若葉（図 11.263）	（図 11.261）
カンジ	0	0	63
ガンジ	6	11	55
ガンボ	63	61	3
ガンボージ	80	117	5

注　数字はその方言形が使われる地点数

このように開花時期も形も共に違っている二つの植物の方言形が互に入りまじって混とんとした状態があることについて，「かんぞう」の方言である**カンジ**から「たんぽぽ」の方言**ガンジ**が生まれたものであるとして，それは「かんぞう」の方言であるカンジと，「たん

図11.262

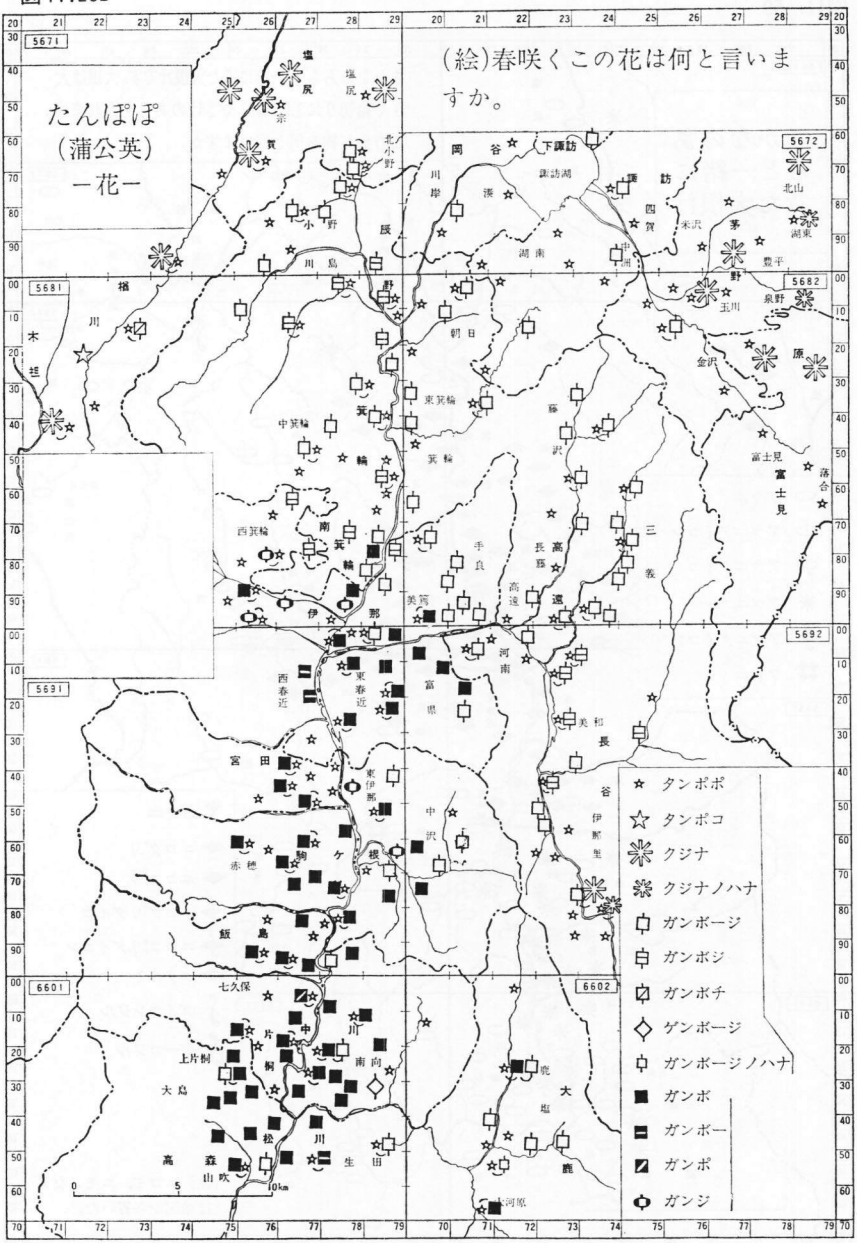
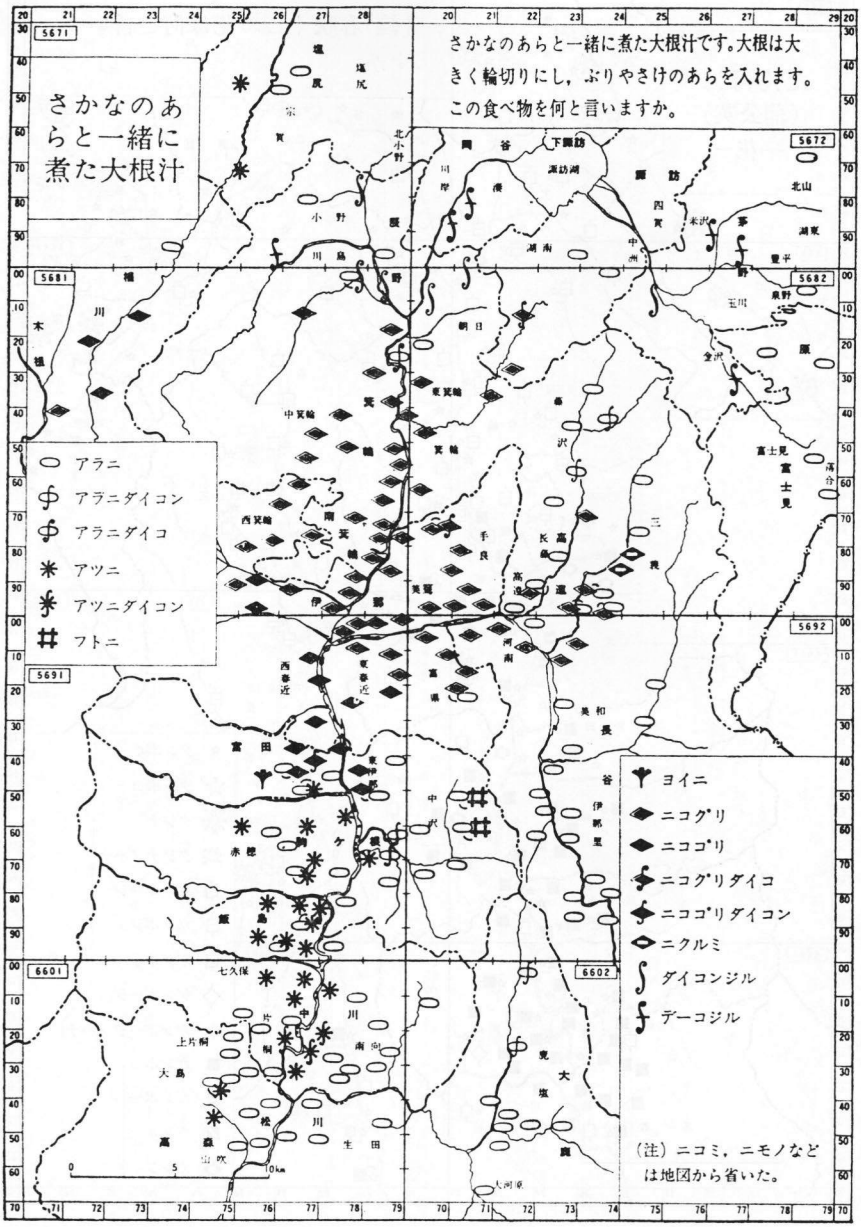

たんぽぽ
(蒲公英)
ー花ー
(絵)春咲くこの花は何と言いますか。
タンポポ
タンポコ
クジナ
クジナノハナ
ガンボージ
ガンボジ
ガンボチ
ゲンボージ
ガンボージノハナ
ガンボ
ガンボー
ガンポ
ガンジ
0
5
10km

図11. 59


さかなのあらと一緒に煮た大根汁
さかなのあらと一緒に煮た大根汁です。大根は大きく輪切りにし，ぶりやさけのあらを入れます。この食べ物を何と言いますか。
アラニ
アラニダイコン
アラニダイコ
アツニ
アツニダイコン
フトニ
ヨイニ
ニコグリ
ニココリ
ニコグリダイコ
ニココリダイコン
ニクルミ
ダイコンジル
デーコジル
（注）ニコミ，ニモノなどは地図から省いた。
5671
5672
5681
5682
5691
5692
6601
6602

ぼぼ」の方言であるガンボージ・ガンボとの間には類音関係があることから，この両者の間に起った「類音牽引」によって，**カンジ＞ガンジ**が成立した，ということを詳しく論証された．そして次の段階では「同音衝突」をひき起して一時的な多義状態を見せたり，意味交錯状態を招来したりしたという見解を示されている．

なお，たんぼぼの方言クジナ，ガンボージについて，クジナは本草和名（901〜923）に現われる「布知奈(フチナ)」に由来し，ガンボージは頭髪の，ある状態に「髪法師」という意識でつけられた名まえではないかという説を立てておられるのも注目される．

本書の281枚の言語地図に見られる方言分布について，北上しようとする語勢の強さ，またそれを阻止する他の語の勢力，なお南下する言語波紋等を見とおして，全域型・南部周辺型・北からの放射・伊那市からの放射　ほか数多い分類をされて，語の放射ないし伝播，また古形残存に焦点をしぼって論じられ，上伊那方言の実相を浮きぼりにされた．

その中から，伊那市からの放射の例としてあげられたものの一つを紹介しよう．

図 11.59　さかなのあらと一緒に煮た大根汁

この分布図について著者は，ニコグリの類は伊那市街地から放射された出自のものであろうとされた．そして，図 11.60　にこごり　(本稿には掲げてないが)では伊那市街を中心とするかなり広い地域で回答の無い地点が多く，方言分布のドーナツ化現象が起っていることについて，「図 11.60　にこごりにおけるニコゴリは，図 11.59 のニコゴリとの同音衝突を避けて，みずからの名を失ったものである」と扱われた．注目すべき説である．

3

本書は，上伊那の数多いインフォーマントとの出会いにおいて得られた調査の結果について，方言学における著者の広く深い研究業績を縦横に駆使してまとめあげられたものとして，汲めども尽きぬ深さを持った好著である．私は，本書の厳密な研究方法に教えられ，密度の高い研究結果に学ぶといっしょに，研究者としての著者の言語愛・人間愛に深く心を打たれた．

本書は，教育関係者にも広く読んでいただきたいと思う．281葉の言語地図は非常に有力な国語教材である．一つ一つの語に寄せる理解や愛情は，本当の言語生活力の基本をなすものと思うからである．

最後に，本書には上伊那方言とその関係事項の索引が掲げられていないことが惜しまれる．より深く上伊那方言を追求し，本書に学んで方言研究を進めるためには，それはぜひ必要なものであったと思う．

なお本書の入手を希望される向きは直接著者まで連絡されたい．

住所　〒390　松本市北深志1—8—17　馬瀬良雄

(昭和55年1月15日発行　上伊那誌刊行会刊　A5判　607ページ)